様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　４ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００００９６

研究課題名（和文）陳独秀の文字学と言語思想

研究課題名（英文）Chen Duxiu's Philology and Linguistic Thought

研究代表者
村田　雄二郎（Murata, Yujiro）

同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授

研究者番号：７０１９０９２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　陳独秀は五四時期にはエスペラントの併存をも許容し，国語で文を書くには各省の多数者に通用する言葉を採用すべきとした。文字は廃すべきだが，言語は国家・民族などの観念があるうちは廃止し難いので，過渡期にあっては漢文を廃して漢語を残し，ローマ字で書くべきだと言う主張で，言語に関しては「革命」というより漸進的改革論であった。1927年8月に失脚してからは，漢字のローマ化問題の研究に専念し，私案『中国ピンイン文字草案』を作り上げた。彼は五四白話を「洋八股」「新文言」だとして痛烈に批判した。国語運動に対しても，民衆の生きた言葉ではないと退け，方言をも許容する「普通語」の可能性を論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　中国共産党史および中国近現代史における陳独秀の活動や思想経歴については，これまで数多の研究がなされてきた。本研究は，陳独秀の政治思想と独自の言語・文字研究という，一見関連することのない領域が，実は彼の中では深く繋がり，その革命活動の両輪をなしていたことを，新発見の資料――『中国ピンイン文字草案』――に基づいて明らかにした点で，新奇性をもつ。また，評価の分かれる晩年の『民主主義』への回帰という問題に対しても，陳独秀が打ち込んだ言語・文字研究の角度から新たな光を与える視座を提供した。

研究成果の概要（英文）：During the May-Fourth era, Chen Duxiu allowed the coexistence of Esperanto and the national language, stating Chinese new literature should be written by such language as majority of people can understand. After he lost his political position in August 1927, he devoted himself to researching the problem of romanization of Chinese characters and produced a private draft, "Draft of the Chinese Phonetic Alphabet. He bitterly criticized the May-Fourth literature style for being overly "westernized". He also rejected the national language movement, saying that it was not the living language of the people, and argued for the possibility of a "common language" that would include various kinds of local dialects.

研究分野：中国近現代史

キーワード：陳独秀　文字改革　ピンイン　五四運動　中国近代史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

陳独秀研究は，イデオロギー的政治的な制約があって，中国大陸ではいまだに自由な議論を行うには制約がある。また，中華民国政府や中国国民党の資料を多く蔵する台湾でも，中共指導者というポジションから，陳独秀研究は概して低調である。実のところ，最も高い水準の陳独秀研究が蓄積されているのは，日本である。近年，平凡社東洋文庫から出版された三冊からなる『陳独秀文集』は，テキストの校訂の確かさ，注釈の翔実さ，解題の充実ぶりなどで，これまでの陳独秀研究の水準を一段高めるものであると評せる。ただ，同文集には陳独秀の言語・文字に関する評論は一切収められていない。本研究はそうした研究上の空白を補う意義を持つ。

２．研究の目的

陳独秀の舌鋒鋭い伝統思想批判や波乱に富む革命活動の実態については，これまで汗牛充棟とも言うべき研究成果が蓄積されてきた。ただ，その中で唯一本格的な研究を欠くのが，彼の文字学者としての一面である。陳独秀は40年近くにわたる旺盛な著述活動において，中国語の音韻や文字に関する多くの論考を遺している。その中には，生前に発表されたものもあれば，いまだに草稿のまま人目に触れず資料館に眠っているものもある。実は，陳独秀には専門的な文字研究を行うと同時に，日本留学中から国語教育や漢字のローマ字表記（拼音）の問題に格別の関心を寄せていた。例えば，初期の著述に「国語教育」と題する一文があり，日本経由の言文一致への興味をうかがわせる。また，1927-28年には独自のローマ字表記案として「中国拼音文字草案」を著した。後年の陳独秀自身の説明によれば，この「草案」は北京・上海・漢口・広州の各方言を国語が十全に成立する以前の過渡的共通語とすること，音韻については国際音標にもとづくローマ字表記案を採用すること，などを述べたものだったという。

本研究は，以上のような研究史上の空白に鑑みて，陳独秀の「小学」研究，および言語・文字改革構想を考察し，彼の言語思想が共産主義者としての革命思想や政治活動といかなる関係があったのかを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

（１）初期の国語教育・文字改革に関する陳独秀の言説分析

「初期」とは，陳独秀が留学先の東京で反清革命運動に参加し，『安徽俗話報』に評論を発表し始めた時期から，民国初年の『甲寅』『新青年』の編集に関わった時期を指す。この時期，陳は中国伝統批判の文脈から，中国にとっての近代文化創造の問題に直面し，その一環として言文一致を含む国語問題に逢着した。陳独秀の初期の評論を分析することによって，国語教育・文字改革を提起した彼の言語思想の時代背景と特徴を把握する。

（２）1927-28年に著された「中国拼音文字草案」の校訂と注解

清末の「切音」（漢字の表音文字）運動では，いくつかの新文字のアイディアが考案され，

また，五四新文化運動では，漢字に代わる中国語のローマ字表記の必要性が論じられた。しかし，教育部が注音字母（1918 年公布）に加えて「国語ローマ字」案を制定するのが 1928 年であるから，陳独秀のローマ字表記案である「中国拼音文字草案」はかなり早い段階での構想と言える。本研究では，未公刊のこの貴重な資料を入手して校訂と注解を加え，完全なテキストとして復元する。

（3）『小学識字教本』の文字学における位置づけ

1932 年に逮捕され入獄した陳独秀は，政治運動から離れて，「小学」（文字学）研究に没頭する。その成果は『東方雑誌』に連載された「実庵字説」などに結実するが，その文字解釈は当時甲骨文研究を進めていた郭沫若からの批判を浴び，論争が展開されるなど，アカデミズムや社会一般からも注目された。陳独秀の文字学の集大成が遺著『小学識字教本』であり，ここには青年時代の国語教育への抱負が，独自の識字教育の提言となって変奏されている。本研究では『小学識字教本』を陳独秀の言語思想全体との関わりで位置づける。

4．研究成果

- 近代中国の言語統一／文字改革の問題を考察した論考を収める単著を中国語版で刊行した。『語言·民族·国家·歴史――村田雄二郎中国研究文集』（楊偉主編），重慶：重慶出版社，2020 年 6 月，228 頁。
- 陳独秀の「中国ピンイン文字草案」に関する考察を進め，学術論文にまとめる作業を進めた。その梗概は以下の通りである。そもそも陳独秀の言語文字問題への関心は清末以来のことだが，彼は五四時期にはエスペラントの併存をも許容し，国語で文を書くには各省の多数者に通用する言葉を採用すべきとした。文字は廃すべきだが，言語は国家・民族などの観念があるうちは廃止し難いので，過渡期にあっては漢文を廃して漢語を残し，ローマ字で書くべきだと言う主張で，言語に関しては「革命」というより漸進的改革論であった。音韻学・文字学への関心は早くからあり，第二革命後の上海時代には『字義類例』，国共分裂後の上海時代には『中国拼音文字草案』，南京監獄時代には『実庵字説』，そして晩年の江津時代には『小学識字教本』の著述に専念するなど，革命活動と表裏しつつも，文字への関心は一貫していた。1927 年 8 月に失脚してからは，ひたすら漢字のローマ化問題を研究し，瞿秋白に先立ち私案『中国拼音文字草案』を作り上げた。彼は五四白話を「洋八股」「新文言」だとして痛烈に批判したが，それは漢字文化が民衆を排除してきた歴史と現状を重く見るからである。国語運動に対しても，民衆の生きた言葉ではないと退け，方言をも許容する「普通語」の可能性を論じた。そこに見られる特徴は，大衆文学の創造という面では「文化革命」を堅持して五四白話を退けつつも，過渡期における言語改革の「穏健」路線を目指したことであった。中国の都市化とプロレタリアの増大によって「普通語」普及の条件が整っていくと期待する点では一貫しており，それは，瞿秋白の「文」から「言」へ，方言から普通語への言語改革構想に近かった。

以上

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 村田雄二郎	４．巻 第869号
２．論文標題 書評「東アジア現代思想史への挑戦：武藤秀太郎『大正デモクラットの精神史――東アジアにおける「知識人」の誕生』」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中国研究月報	６．最初と最後の頁 37,39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村田雄二郎	４．巻 第30号
２．論文標題 「孫中山之後的大亜洲主義：民国時期中国的日本認識」（宋舒揚訳）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本学研究	６．最初と最後の頁 9,28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村田雄二郎	４．巻 9号
２．論文標題 1949年の選択――知識人と中国革命	５．発行年 2019年
３．雑誌名 研究中国	６．最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 村田雄二郎
２．発表標題 陳独秀の言語と革命
３．学会等名 五四運動百周年記念シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 村田雄二郎
２．発表標題 陳独秀の言文一致思想
３．学会等名 国際シンポジウム「国語施策／言文一致運動を東アジアの視点から考える」（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田雄二郎
２．発表標題 近代中国における言語・文字問題
３．学会等名 四川外国語大学翻訳系
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 村田雄二郎	４．発行年 2020年
２．出版社 重慶：重慶出版社	５．総ページ数 228
３．書名 語言・民族・国家・歴史――村田雄二郎中国研究文集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関